

大学英語CALL授業での自律学習における受講者の行動

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/6796486>

出版情報：言語科学. 43, pp.87-93, 2008-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



大学英語 CALL 授業での自律学習における受講者の行動

鈴木 右 文

1 はじめに

九州大学では、2006 年度に導入された英語新カリキュラムにより、コンピュータ端末上で英語教材に取り組む自律学習による科目が導入された。本稿は、2007 年度後期に筆者が担当した授業におけるデータをもとに、コンピュータ上の自律学習というスタイルにおける、受講者の好ましからざる行動の分析を試み、大学教育における今後の CALL における自律学習の展開に寄与することを目的としている。

2 分析対象の授業

その分析の対象とするのは、筆者が担当した 2007 年度後期英語ⅡB（月曜1限）で、受講者数が理学部数学科と医学部医学科の一部合計で 100 名を越える規模において展開された。学内 LAN に接続されたコンピュータ端末を持つ 2 つのいわゆる CALL 教室を使用した。扉一枚隔てて隣り合った教室なので、境にある扉のところに立ち、マイクで 2 教室に分かれた受講者に同時に語りかけることができた。この他 TA（ティーチングアシスタント）が 1 名配置されるので、自律学習時にどちらかの教室が監督者不在になるということはない。授業初回のオリエンテーションの時だけは、教材の操作方法等、プロジェクト等を使用した説明事項が多くあるので、一方の教室に受講者を集める。通路や壁際で立ち見の受講者も多く発生するが、初回の限られた時間だけのことなので、我慢してもらっている。

新英語カリキュラムでは、英語を第 1 外国語として選択した場合、1 年次前期に大学英語学習の基盤形成を図る講義的科目の英語Ⅰで始まり、1 年次前期の英語ⅡA と 1 年次後期の英語ⅢA で作文およびプレゼンテーション（ⅡA ではパラグラフ単位が中心、ⅢA では複数パラグラフからなるエッセイ）を訓練し、1 年次後期の英語ⅡB と 2 年次前期の英語ⅢB でオンライン自律学習によるリーディングとリスニングと文法の訓練を行い、2 年次前期（文系学部のみ）と 2 年次後期には、アラカルト方式で受講者が興味のある内容の授業を選択することができる枠として、英語Ⅳを履修する。

英語ⅡB は 1 年生全員が履修し、英語ⅢB は医学部保健学科、工学部機械航空学科、芸術工学部（これらの学生は学部において学部の教員から専門分野の英語科目を履修する）以外の学生が受講する。これらの科目が教員 1 人当たりの受講者数がかかなり多い形で実施されている背景には、英語ⅡA および英語ⅢA が添削指導の充実のために 20 名から 25 名の規模で実施されているということがある。近い将来、教員の負担がより少ない形で実施することも検討されており、ゆくゆくは実質的に教員が監督をしない形での実施も視野に入れられている。それではたして英語ⅡB・英語ⅢB が十分な授業効果をあげることができるのか、その検証が待たれている段階であり、

本稿はその一部をなすものでもある。

3 使用教材

英語ⅡB・英語ⅢBが使用するオンライン英語学習教材は、広島市立大学が開発した「ぎゅっとe」で、英語ⅡBでは、「リーディング中級」、「リスニング中級」、「グラマー」の半分に取り組み、英語ⅢBでは、「リーディング上級」、「リスニング上級」、「グラマー」の残り半分の演習を行う。中級はTOEICで言うと450-650点程度、上級は600-800点程度を目標としたレベルとされている。英語ⅡBがTOEICまたは九州大学で実施されるTOEIC-IPで取得した645点以上のスコアで単位認定により履修免除になり、790点以上になると英語ⅢBも免除されることと整合している。この教材には装飾が少なく、多量の問題を一定短期間のあいだにこなすシンプルでインテンシブな演習プログラムとなっている。

4 問題意識

教員としては、受講者がまともに顔面どおりに取り組んでくれるのが望みなのであるが、受講者数が多く、相手がコンピュータだということになると、教員に目配りされているという意識がどうしても薄くなりがちであり、中身の薄い辻褃合わせ的な受講態度で切り抜けようとする者が出てきても不思議ではない。そのような受講者が多く発生すれば、せっかく英語ⅡA・英語ⅢAで少人数授業が成立していても、それでは追いつかないくらいの学習効果減につながる恐れもある。そうなつては元も子もないわけであるから、受講者の学習行動に問題があれば、その実態をよく調査し、その特徴をあぶり出して、対策を考えなくてはならない。

分析対象の授業では、「ぎゅっとe」の自律学習が授業時間中の主な作業となり、評価については、その作業の学習履歴データ（40点分）、「ぎゅっとe」から出題する学期中計数回の中間試験（30点分）、TOEIC型の実力試験を内容とする定期試験（30点分）の3つに基づいて算出される（この点は筆者の授業に限らず全クラス共通である）。実力試験である定期試験に関しては何のごまかしようもないわけであるが、中間試験と学習履歴については受講者の行動はどうなっているのか。それぞれの詳細について見てみたい。

5 中間試験に見られる駆け込み学習

中間試験は学期中に2回から4回、「ぎゅっとe」から試験範囲を定めて実施し、試験日前日までの試験範囲学習終了が単位取得の条件になることが、担当教員の共通了解事項となっている。筆者の場合は10点満点の試験を3回実施した（授業の100点満点の評価のうち30点分が中間試験によるわけである）。分析対象の授業での問題総数は、リーディングが300-400語前後の本文に10題の設定問がついた問題で40問、リスニングが800問、グラマーが412問であるが、全中間試験の出題範囲を合わせたもの、すなわち最終学習分量のノルマとしては、リーディングが35問、リスニングが720問、グラマーが350問であった（おおよそ9割終了を求めたわけである）。

問題の消化数不足により単位取得が不可能になった受講者は、第1回目の中間試験のときに3名発生したが、その後はゼロであった。恐らくこの3名は、第1回目の中間試験のときに、定

められたとおり、学期途中の段階でも問題消化数不足によって本当にアウトになるとは思っていなかったのだと推測される。この点はかなり力説したつもりであったが、結果的にたかをくくる受講者がいたとすれば、残念なことである。アウトになった受講者がいるということが他の受講者の知るところとなったので、その後は同じ問題が繰り返されることはなかった。九州大学では2007年度の新入生から GPA 制度が導入されており、必修科目の履修中止は、成績がつかないのではなく、不合格扱いになることを意味するので、成績歴に傷がつき、履修科目全体の成績の平均評定値も下がることになるから、受講者にとって必修科目は気軽に放棄できないことになっているのである。しかし、問題消化数についてのノルマが達成されること自体は喜ばしいことなのだが、そこに照準を合わせるあまり、2007 年度前期に見られた異常な学習行動が、2007 年度後期でも相変わらず改善されないという結果になった。

実は 2007 年度前期の英語ⅢB では、中間試験による学期途中での消化問題数の関門がなかったため、ノルマ問題数の 9 割以上を学習期間最後の数日でこなすなど、異常な学習行動を取る受講者が続出していた。その反省に基づき、2007 年後期においては、中間試験による消化問題数の関門を学期途中に小刻みに設けることによって、そのような異常な学習行動が発生しないように改善したつもりであった。

ところが、中間試験で複数の関門をせっかく設けても、それぞれの中間試験直前に出題範囲の学習を集中させる傾向が見られたのである。そのことはまず、鈴木（2008）「大学英語カリキュラムでの大規模自律学習の展開 ―九州大学の場合―」（『英語英文学論叢』第 58 集）で報告されているように、第 1 回目の中間試験までについての、週ごとの学習問題数のデータに現れている。文法問題はもっとも取り組みやすかったためか、他の 2 つとは違う傾向を示している。

- ・第 1 週：リーディング 0.6 問、リスニング 10.0 問、文法 16.3 問
- ・第 2 週：リーディング 1.1 問、リスニング 17.6 問、文法 17.3 問
- ・第 3 週：リーディング 2.3 問、リスニング 47.0 問、文法 43.9 問
- ・第 4 週：リーディング 5.8 問、リスニング 122.7 問、文法 37.0 問

第 2 回目の中間試験についても、下記に示しているように、状況は変わることがなかった。文法だけはコンスタントと言える。

- ・第 5 週：リーディング 1.0 問、リスニング 26.7 問、文法 32.9 問
- ・第 6 週：リーディング 1.5 問、リスニング 37.1 問、文法 29.9 問
- ・第 7 週：リーディング 1.6 問、リスニング 33.6 問、文法 19.8 問
- ・第 8 週：リーディング 1.7 問、リスニング 36.9 問、文法 22.7 問
- ・第 9 週：リーディング 4.7 問、リスニング 77.8 問、文法 22.6 問

第 3 回の中間試験についても同様である。

- ・第 10 週：リーディング 0.9 問、リスニング 24.3 問、文法 22.7 問
- ・第 11 週：リーディング 1.3 問、リスニング 35.3 問、文法 28.2 問
- ・第 12 週：リーディング 2.7 問、リスニング 66.2 問、文法 41.9 問
- ・第 13 週：リーディング 0.5 問、リスニング 8.0 問、文法 5.9 問
- ・第 14 週：リーディング 1.0 問、リスニング 15.1 問、文法 8.5 問

- ・第15週：リーディング 2.2 問、リスニング 35.3 問、グラマー 21.4 問
- ・第16週：リーディング 6.5 問、リスニング 138.1 問、グラマー 21.3 問

つまり、関門を小刻みにしても、学習期間終盤に学習を集中させる行動は不変だということである。この傾向が好ましいわけではない。コンスタントに学習しないと学習効果が上がらないし、問題の取り組みが雑になってしまう。

6 学習履歴データに見られる駆け込み学習の弊害

サーバに残されている受講者の学習履歴等からは、授業の成績 100 点満点のうち、40 点分が決まるというのが担当教員の共通理解事項になっている。その内訳は、受講者の所属学部学科等を勘案して、各教員が独自に定めることとなっているが、筆者の場合は、消化状況、正解状況、学習安定状況、出欠状況にそれぞれ 10 点を割り当てている。

学習安定状況は、5 節で問題とした駆け込み学習を防ぐための項目である。算定方式は種々考えられるが、著しい駆け込み学習があれば、学習安定状況に割り与えられた 10 点は与えないこととしたいものである。但し、冬期休業期間中（第 13 週と第 14 週）においては、大学の情報教室が閉室になるため、自宅がインターネットに接続していなかったり、自宅では接続していても、帰省先の実家では接続していないなど、学習環境が十分でないことも考えられる。このように、いくつか斟酌すべきこともあるため、慎重に算定基準を策定する必要があるだろう。

ちなみに不安定な学習の例を挙げておくと、最後まで履修を継続した 97 名のうち、16 週間の中で学習がなかった週が最高でいくつあるかを見てみると、次のようになっている。

- ・リーディング：12 週
- ・リスニング：13 週
- ・グラマー：12 週

これはすなわち、16 週のうち、ほとんど 3 回の中間試験の直前の週にしか学習していないということである。

また、このような追い込み型の学習を行うと、5 節末で指摘したように、学習が雑になる。全受講者が 1 問当たりに使っている時間等と、前回の学習のない週が異常に多くて追い込み学習を行った受講者が 1 問当たりに費やした時間等を比較すると、次のような、極めて大きな差があることがわかる。

- ・リーディング：

1 問あたり所要時間	全受講者平均 13 分 35 秒、	問題のある受講者 6 分 59 秒
1 分あたり読解語数	全受講者平均 229 語、	問題のある受講者 1072 語
- ・リスニング：

1 問あたり所要時間	全受講者平均 27 秒、	問題のある受講者 17 秒
------------	--------------	---------------
- ・グラマー：

1 問あたり所要時間	全受講者平均 33 秒、	問題のある受講者 14 秒
------------	--------------	---------------

「ぎゅっと e」のリーディングでは、九大生の英語力だと分速 100 語を大きく切る位になるはずなのだが（筆者でも恥ずかしながらせいぜい 150 語程度である）、ろくに本文を読まずに解答す

る受講者が多いために、全受講者の平均が押し上げられ、229 語という驚くべき数字になっているものと考えられる。上記の学習のなかった週が最も多かった受講者では 1072 語で、毎秒 17 語という、ネイティブスピーカーでも難しい数字になっており、恐らくはざっとしか本文を読まずに、半ばでたために解答したか、もしくは他の受講者から解答を教えてもらって入力したのではないかと推測できる。受講者ひとりひとりについて 5 問のブロックごとの平均データを調べてみると、最もひどい受講者では、分速 15180 語のブロックがあり、全く問題を読んでいないことは明らかである。分速 1000 語を越える 5 問のブロックがある受講者は 97 人中 16 人もいた。また、その 16 人の問題になっているブロックを調査してみると、4 名について、すべての小問を同じ選択肢でそろえている問題が見つかった（ひとつの問題英文に 10 の小問があり、その答えを全て A とか全て B などとしているということ）。これは、内容を見ないで機械的に同じ記号を選び、学習したふりをしたということである。あら探しをすればまだまだおかしいデータが出てくるであろう。

リスニングも、上記の学習のなかった週が最も多かった受講者では 17 秒と、全受講者の平均の 27 秒から比べると、かなり速い。この程度であると、たまたま能力の高い学生であるということかもしれないが、最も速かった受講者では平均 9 秒であり、この場合はどう考えてもおかしい。問題文音声の流れ終わるのにこのくらいの時間がかかるからである。この受講者のリスニング 80 問のブロック毎の、平均正答率 (%) と 1 問あたりの所要時間 (秒) を見ると、次のようになっている (721-800 問目は未解答)。

	全体	/001-080	/081-160	/161-240	/241-320	/321-400	/401-480	/481-560	/561-640	/641-720
平均正答率	63	53	49	45	41	38	84	89	88	86
所要分数	9	19	18	19	7	3	6	4	4	4

最初の 240 問を見ると、20 秒近くかけて 5 割程度の正答率というのがこの受講者の実力ではないかと思われるが、その先 400 問目のあたりまでは、問題文を聞かずに選択肢を勘で選んだため、所要時間が極端に短くなった上、正答率も落ちたものと考えられる。その先 720 問目までは、コンスタントでない学習をした上に正答率まで落ちては不合格になると考えたからか、恐らくは英語の得意な仲間から答えを仕入れてそれを入力したため、問題文を聞き終わることすらできない 4 秒という所要時間で 9 割近い正答率となったものであろう。これは当然不正な学習であり、到底単位の取得に値しない。他の受講者についても同様のデータをチェックしてみると、1 問あたりの平均所要時間が 10 秒を切る 80 問のブロックが 720 問目までにある（単位取得の必要条件は全体の 9 割にあたる 720 問である）受講者は、97 名中 11 名もいた。

文法についても、上記の学習のなかった週が最も多かった受講者では 14 秒と、全受講者の平均の 33 秒から比べると、かなり速い。しかし文法は全体にコンスタントに取り組まれており、調べてみるとこの受講者は、駆け込み型の学習を行ったのではなく、早々とノルマをこなしたために、学習問題数ゼロの週が後に並ぶこととなったもので、早く終了した仲間から答えを仕入れることができようはずもなく、平均正答率が抜群の 92%（全受講者平均は 78%）であることからして、きちんとしかも迅速に解答したのであらうと想像できる。しかしそれでも、1 問あたりの平均所要時間が 10 秒を切る 45 問のブロックがある受講者は、97 名中 5 名もいた。リスニ

ングに比べて少ないのは、全体がコンスタントに学習されたからであると思われるが、なぜグラマーが比較的良好に学習されたのかを考えてみると、やはりリーディングに比べて短時間に解答でき、また、高校までの学習によって、リスニングに比べて苦手意識が少なく、正答率も高い（後で見るように全受講者の平均正答率はリスニングで 70%に対しグラマーでは 78%である）からではないかと推測できる。

以上のことから、全体として、駆け込み学習が雑な学習につながっていると言える。算定方法の詳細は省略するが、コンスタントな学習に割り当てた 10 点について受講者を見渡してみると、2 点から 10 点までかなり散らばっている。

次に消化状況については、ノルマの未消化が単位取得の失敗を意味することになっていたため、中間試験の範囲をこなすことができずにドロップアウトした 3 名を除けば、形の上では良好であった。消化率に割り当てた 10 点は、合格者全員が 10 点もしくは 9 点であった。

また、正解状況であるが、リーディングとリスニングとグラマーの正答率を平均し、10 点満点に換算してみたところ、5 点から 9 点に分布している。因みに、リーディング、リスニング、グラマーに分けて、それぞれ全受講者平均、最高、最低を調べてみると、以下のようになっている。

- ・リーディング： 全受講者平均 65% 最高 86% 最低 32%
- ・リスニング ： 全受講者平均 70% 最高 88% 最低 43%
- ・グラマー ： 全受講者平均 78% 最高 91% 最低 58%

出欠状況にも 10 点を割り与えたが、2 点から 10 点まで分かれた（再び算定方法の詳細は省略する）。遅刻または欠席が増えると与えられる点数が減るだけでなく、遅刻または欠席が 5 回に達すると単位取得ができなくなることとしたのだが、それにもかかわらず出欠状況の悪い受講者もいた。結果的に、最後まで受講した者の中における不合格者 5 名は、出欠に問題がなければ合格していた。

結局、授業開始時に明示した基準に基づいて成績判定を行った結果、中間試験範囲の学習未了で 3 名が不合格、その他の理由で 5 名が不合格になったわけだが、最後まで受講した者を見渡した場合、どれだけコンスタントでない学習を行ったり、雑な学習を行ったりしても、出欠状況に問題がなければ不合格にはならなかった。このような問題のある学習実態を結果的に認めてしまうこととなったのが反省点である。

7 改善策

学期中にもたびたび、データを具体的に示しながら、全体への指導や個人への指導も教材内メールで行ったが、結局中間試験のたびに駆け込み学習が繰り返される結果となったことは否定できない事実である。教員がどれだけ労力をかけて指導しようともこのような形になるのであれば、やはり約束事で縛りをきつくするしかないのであろうか。鈴木（2008）（前出）では中間試験の頻度を上げることによって 2 週間毎にノルマを設定することを提案したのだが、それでも恐らく、締切日間際に学習が集中することになり、雑な学習が展開されることになるのは目に見えているように思われる。たとえ毎週ノルマを設定しても、締切日に学習が集中する結果になるであろう。そうなると、雑な学習を防ぐために、何かこれまでとは違った方策を編み出さなければならない

ことになる。

考えられる方策としては、5回の遅刻または欠席で単位が取得できなくなるという条件に合わせ、学習が全くない週がある場合は単位が認定されない、とする方法がまずある。しかしこれでは週に1問でも解けばよいことになるので、大して効果はないだろう。例えばリスニングは800題あり、16週でこなすには1週あたり50問ということになるが、人間であれば学習量にある程度の変動はあるものであり、半分の25問を死守すべき最低ラインと定め、それに達しない週があれば単位を取得できないということにしたらどうであろうか。しかし、長い学期中には病気をすることもあるであろうし、大学祭で時間が取られることもあるであろうし、部活動の大会なども考えられ、25問に達しない週がひとつでもあればアウトということでは、実際問題としてきつすぎると思われる。また、前出のように、冬期休業中の2週間については配慮が必要であろう。そこで、25問に達しない週が3回か4回に達する場合に単位取得を認めない、という線が妥当なところではないかと思われる。

また、極端に短い時間で雑に学習することを防止する意味で、ブロック（リーディングでは5問でひとつのブロック、リスニングでは80問でひとつのブロック、グラマーでは45問でひとつのブロック）ごとに平均所要時間を求め（「ぎゅっとe」ではそのような数値が自動計算されて教員が閲覧できる）、一定基準値以下の場合は単位を与えないという手もあるように思う。その場合の基準値は、リーディングの読解速度で分速200語以上、リスニングで1問あたり10秒未満、グラマーで1問あたり10秒未満程度ではどうであろうか。もちろんまともに学習していても、まれにこれらに該当する数値を記録することがあるかもしれないが、1つのブロックの多くの問題でそうなるとはあまり考えにくい。

8 まとめ

本稿では、九州大学で展開されているコンピュータ上の英語自律学習における受講者の学習行動を観察した結果判明した問題行動についてまとめ、その解決策を提案することによって、大学英語教育におけるCALLでの自律学習の展開への貢献を志した。